

# 児童における運動・スポーツ・ 運動遊びのイメージの特徴と 今後の課題



枝元 香菜子

Kanako EDAMOTO

人間学部児童教育学科助教

## 1. はじめに

近年は、環境や社会の変化に伴う子どもたちの体力や身体活動の低下は未だ問題視されており、特に、身体を動かす子とそうでない子の二極化についてはなかなか解決されず課題となっている。実際に学校での体育以外で体を動かすことがないという子どもたちも多数いる。子どもの身体活動ガイドラインでは、「子どもは、からだを使った遊び、生活活動、体育・スポーツを含めて、毎日、最低60分以上からだを動かしましょう」と示されている。また、幼児期運動指針においても、「幼児は様々な遊びを中心に、毎日、合計60分以上、楽しく体を動

かすことが大切です」と示されている。しかし、1日60分を達成できていない子どもたちも多数いることが報告されている。筆者は以前、運動やスポーツ、運動遊びをもっとしたいかについての調査結果として、いまよりもっと運動・スポーツ、運動遊びをしたいと感じている児童が多いことを報告した（枝元、2017）。いまよりもっと運動・スポーツ、運動遊びをしたいと感じている児童が多いことについては、遊び場の減少や制約、少子化など様々な環境や社会の変化も大きく関連していると考えられる。「子どもの体力向上のための総合的な方策について（答申）」（中央教育審議会、2002）では、3つの間（時間、空間、仲間）の減少が指摘されている。先行研究においても、実際に外遊びの減少の原因として、テレビゲームなどの室内遊び時間が増えたことによる外

遊びやスポーツ活動時間の減少、空き地や生活道路などの子どもたちの手軽な遊び場の減少、少子化や、習い事などによる仲間の減少などが挙げられている（入口ら、2009）。

近頃は、昔に比べて子どもたちが元気に外で遊んでいる姿を目にする機会は少なくなったのではないだろうか。確かに公園の減少や安全性の問題などもあるが、様々な遊具が設置されているにもかかわらず、子どもたちの姿が見えないガラガラの公園も多く存在している。子どもたちの姿があっても、そこでは遊具の上で何人かと座って向き合いゲームをしていたりする。また、公園内でも様々な規制があり、「ボール遊び禁止」「自転車乗り入れ禁止」など子どもたちに人気な運動・スポーツ・運動あそびが危険な遊びとして自由にできなくなっている現状もある。このような現状がある中でも、寒い日に半袖短パンで元気に走り回っている子どもを見ると、どこかでほっとする気持ちはあるものの、めずらしいとか懐かしいと感じる部分もある。果たして今の子どもたちは、外遊びについてどのようなイメージを抱いているのだろうか。

これまで子どもの身体活動に関して、実態調査や改善のための手立ての探索など様々な研究が行われている。しかしながら、子どもたちの運動に対するイメージについて、子どもたち自身の言葉を用いて計量的に分析している調査はあまりみられない。そこで本稿では、子どもたちが運動・スポーツ・運動遊びに対してどのようなイメージを持っているかを抽出し全体像を明らかにするとともに、性別や運動の好き嫌いによる特徴についても調べていくこととする。

## 2 児童の運動・スポーツ・運動遊びに対するイメージ

### (1) 調査概要

長野県A市の小学校に通う4～6年の児童335名（男子：180名、女子：155名）を対象に、運動・スポーツに関する質問紙調査を行った。本研究は、ヘルシンキ宣言を尊重し、対象者の人権及び利益の保護に配慮した研究

計画を立て、順天堂大学の倫理委員会での承認を経て実施した。研究実施にあたっては、学校長、児童本人およびその保護者に研究の目的と方法を説明した上で、研究協力の同意が得られた児童のみを調査・分析の対象とした。調査は平成29年5月～7月にかけて実施した。

質問紙は、運動・スポーツ・運動遊びに対するイメージについて回答欄を2か所用意し、自由記述によって回答を求めた。具体的には、「運動やスポーツ、運動遊び」から、あなたはどんなことを思い浮かべたり、イメージしたりしますか。思いつくことを2つまで作文してください。」と質問をし、回答を得た。また、対象者特性として、性別および運動の好き嫌い（4件法：好き、どちらかというが好き、どちらかという嫌い、嫌い）も尋ねた。

分析は、計量テキスト分析ソフトKH Coder（Ver. 2.00f）を用いて、得られたイメージについて計量テキスト分析を行い、全体および性別ごとの出現単語数の特徴を調べた。また、共起ネットワーク分析により、性別および運動の好き嫌いによるイメージの差異についても分析を行った。有効回答数は307件あり、そのうち2か所の回答欄のいずれも記入した児童の割合は70.0%であった。

### (2) 結果

#### ①対象者内訳

性別および運動好き嫌いの内訳について表1に示した。上記でも示したように307名の回答を分析対象とした。今回、「運動やスポーツ、運動あそびをするのが好きですか」という質問に対して、「好き」と回答した児童が多くみられ、全体の65%に及んだ。一方で、「嫌い」や「まあ嫌い」と答えた児童は少なく、全体の10%未満であった。

表1 対象者内訳

内訳	好き	まあ好き	まあ嫌い	嫌い	合計
男子	119	32	8	6	165
女子	81	47	12	2	142
合計	200	79	20	8	307

表2 出現単語数 一覧

	全体		男子		女子	
	抽出語	出現回数 (回)	抽出語	出現回数 (回)	抽出語	出現回数 (回)
1	楽しい	144	楽しい	64	楽しい	80
2	運動	82	サッカー	41	運動	43
3	ドッジボール	71	運動	39	思う	39
4	思う	64	ドッジボール	37	ドッジボール	34
5	スポーツ	57	スポーツ	29	スポーツ	28
6	サッカー	52	思う	25	バスケットボール	23
7	思い浮かべる	36	野球	20	鬼ごっこ	23
8	鬼ごっこ	35	イメージ	17	思い浮かべる	19
9	バスケットボール	32	思い浮かべる	17	好き	16
10	イメージ	30	疲れる	14	走る	16
10	疲れる	30			疲れる	16

②計量テキスト分析

「運動・スポーツ・運動遊びに対するイメージ」について、どのような語によって語られているのかを確認するために、全体および男女別におけるそれぞれの出現単語数の上位10単語を表2に示した。

今回、「楽しい」という単語が最も多く出現していた。運動・スポーツ運動遊びに対するイメージについて、「楽しい」「運動」「ドッジボール」「思う」「スポーツ」という語が多く用いられ表現されていることから、多くの児童が「楽しい」とイメージをもっており、中でも「ドッジボール」が人気であることが見て取れる。それ以外の運動・スポーツ・運動遊びとして「サッカー」「鬼ごっこ」「バスケットボール」が挙げられ、イメージが語られていることも分かる。また、質問の特性上、「思う」「思い浮かべる」「イメージ」という単語が多く出現したと推測できる。さらに、「疲れる」という単語も上位10単語に挙げられ、一定数の児童が運動・スポーツ・運動遊びに対して「疲れる」と感じていることも見て取れる。

男女別にみても、「楽しい」という単語が最も多く用いられていることが分かる。男子においては「ドッジ

ボール」よりも「サッカー」の方が出現回数を上回っている。また、「野球」という単語が見られるのも男子の特徴であると考えられる。女子においては、「バスケットボール」「鬼ごっこ」を挙げられ、それに付随して「好き」「走る」といった単語も用いられていた。

③共起ネットワーク

「運動・スポーツ・運動遊びに対するイメージ」について、語と語の関連の強さやどのような単語をキーワードに運動・スポーツ・運動遊びが語られているかを把握するために、共起ネットワーク分析を行った。出現単語数7回、58単語で分析をし、媒介サブグラフによるクラスタリングの結果を図1に示した。円が大きいほど出現回数も多く、また円と円を結ぶ線が太いほど関連が強い。今回、媒介性に基づいたサブグラフによるクラスタリングでは、6個のグループが示された。

まず図の左下に「運動・スポーツは楽しい」というグループが抽出された。「楽しい」の語の円が一番大きく、その周りには「運動」「スポーツ」「思う」「ドッジボール」の語の円が結ばれている。これらの結果から、子どもたちが「運動・スポーツは楽しい」「ドッジボールは楽しいと思う」というイメージを共有していることが

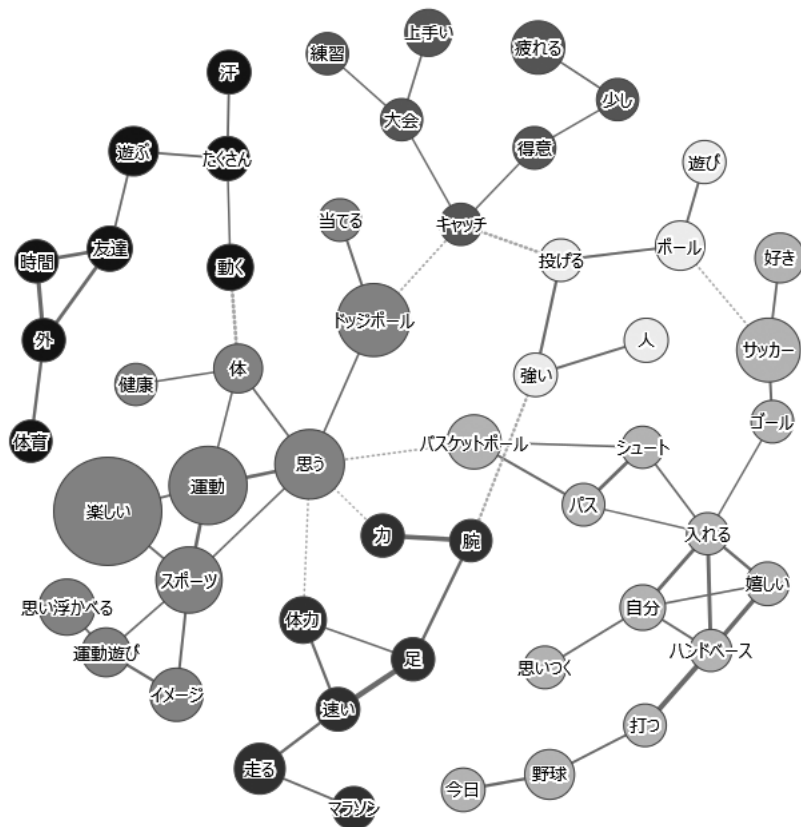


図1 運動・スポーツ・運動遊びに対するイメージの共起ネットワーク

推測できる。右下には、「球技」に関するグループが抽出された。ここでは、「サッカー」「バスケットボール」「ハンドベース」「野球」という語があり、その周りには「シュート」「パス」「ゴール」「打つ」などの語が結ばれていることが分かる。中でも「ハンドベース」は「打つ」という語と太い線で結ばれている。また、「シュート」や「ゴール」をしたり、「打つ」ことによって得点を入ることとで「嬉しい」というイメージがあることも読み取れる。中央下には、「力」に関するグループが抽出された。ここでは「腕」と「力」、「足」と「速い」の円同士が太い線で結ばれている。「体力がつく」、「腕の力がつく」、「走ることで足が速くなる」といったイメージが表現されている。左上には、「外遊び」に関するグループがあり、「外」「友達」「遊ぶ」「たくさん」といった語の結びつきが見られた。また、中央上には、「大会」「上手い」「得意」「疲れる」といった語による子

どもたちの「気持ち」に関するまとまりができた。右上には、「ボール遊び」に関するグループが抽出された。

次に、性別・運動の好き嫌いを考慮した共起ネットワーク分析を行った。運動の好き嫌いについては4件法(好き・どちらかというとき好き・どちらかというとき嫌い・嫌い)で尋ねたが、嫌いと回答した児童が少なかったため、好き・どちらかというとき好きを「好き」、嫌い・どちらかというとき嫌いを「嫌い」の2群で調査した。運動好きの男子(好き男)、運動好きの女子(好き女)、運動嫌いの男子(嫌い男)、運動嫌いの女子(嫌い女)のイメージの特徴を図2に示した。

図の中心部にある「楽しい」の語の円は大きく、運動好きの男女ともに太い線で結ばれていることから、運動好きほど、運動・スポーツ・運動遊びに対して「楽しい」というイメージをもっていると考えられる。また、「疲れる」の語の円は、運動嫌いの男女と結ばれている。

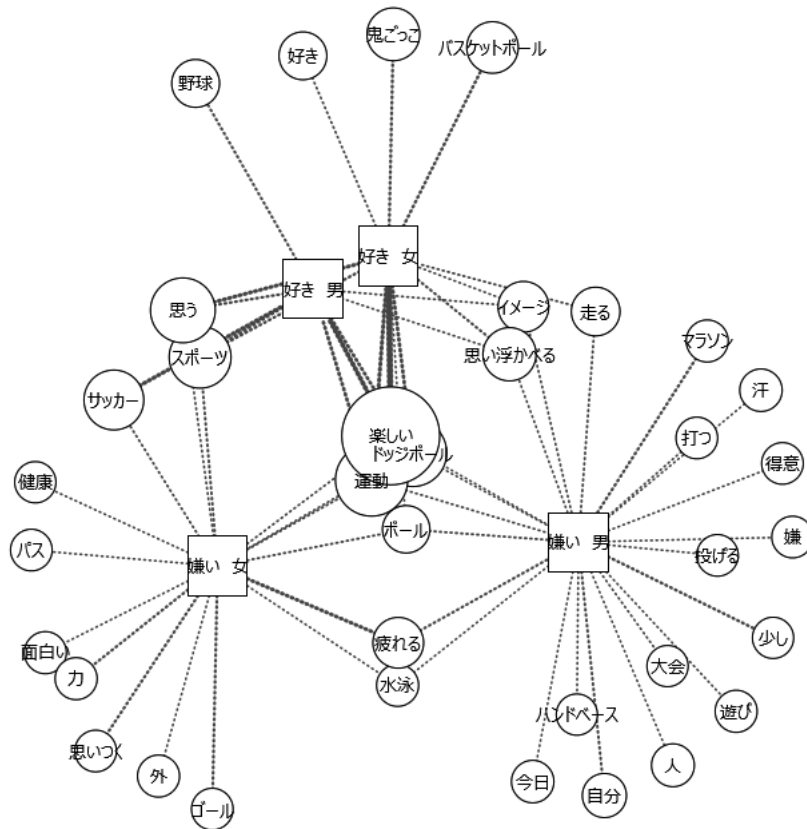


図2 性別・運動の好き嫌い別の運動・スポーツ・運動遊びに対するイメージの共起ネットワーク

男子に比べて女子のほうが、語の円を結ぶ線が太いことから、運動嫌いに加えて女子である場合は、「疲れる」といったマイナスのイメージをもっている可能性がある と推測できる。

運動好き男子特有の単語としては、「野球」が抽出された。「サッカー」の語の円と結ばれている線も太いことが見て取れる。運動好き女子では、「バスケットボール」「鬼ごっこ」「好き」が抽出された。一方、運動嫌いの男女では、運動・スポーツ・運動遊びに対して一人ひとりが様々なイメージを持っており、特定の単語は抽出されなかった。

(3) 考察

①運動・スポーツ・運動遊びに対する全体的なイメージ  
計量テキスト分析の結果、出現単語数は「楽しい」と

いう語が最も多かった。個々の文章に立ち返ってみると、「楽しい」という単語のみの他に、運動、スポーツと結び付けたり、具体的な運動種目や運動場面を挙げたりしてイメージされていた。

- ・楽しい。
- ・運動やスポーツは楽しいものが多い。
- ・サッカーは楽しいです。
- ・ボールを蹴ってゴールに入った時が一番楽しい。
- ・走る遊びスポーツが楽しい。
- ・バスケットボールの試合をしているととても楽しい。
- ・運動は好きだから楽しい。
- ・ドッジボールで当てたりして楽しい。
- ・ドッジボールで楽しく遊ぶ。

クラスタリングの結果において、「楽しい」は「運動」「スポーツ」「思う」「ドッジボール」などと結びつきが



あり、多くの子どもたちが「楽しい」イメージを持っていると判断できる。

今回、多く出現した単語の中に「ドッジボール」「サッカー」「野球」「バスケットボール」「鬼ごっこ」といった運動種目(遊び)が複数挙がった。また、クラスタリングにおいても球技およびボール遊びに関するグループが抽出された。「青少年のスポーツライフ・データ2015 10代のスポーツライフに関する調査報告」(笹川スポーツ財団、2015)によると、過去1年間に「よく行った」運動・スポーツ種目について小学校期の男子では、1位サッカー、2位ドッジボール、3位鬼ごっこ、4位バスケットボール、5位野球となっており、女子においても、1位鬼ごっこ、3位ドッジボールが挙げられている。また、奥野ら(2016)の今までで一番楽しかった外遊びの研究結果においても、上位3つは「サッカー」「ドッジボール」「鬼ごっこ」であると示されている。これらの選考研究の調査結果を踏まえると、運動・スポーツ・運動遊びに対するイメージは、子どもたちがよく行っている種目や楽しいと感じている種目に関して語られることが多いことが示唆された。

## ②性別および運動の好き嫌いを考慮した運動・スポーツ・運動遊びのイメージ

出現単語数において男女での違いが見られ、「ドッジボール」以外で上位にあがった運動種目が男子は「サッカー」「野球」、女子は「バスケットボール」「鬼ごっこ」であった。また、性別および運動の好き嫌いを考慮した共起ネットワーク分析からは、運動好きの児童は、「ドッジボール」に加えて、男子は「野球」「サッカー」、女子は「バスケットボール」「鬼ごっこ」に対して「楽しい」というイメージをもっていることが明らかになった。女子においては「好き」というイメージもあった。

運動嫌いの児童については、男女ともに「疲れる」という語との結びつきがみられた。運動が嫌いと回答した児童の人数がそもそも少なかったこともあり、それ以外に単語としての明らかなまとまりは見られなかった。奥野ら(2016)の研究において、体を動かすことや外で遊ぶことが好きではない理由として「疲れる」が最も多いことが示されている。実際に個々の文章に立ち返ってみ

ると「疲れる」という単語を含む回答やネガティブ思考の回答の割合が運動好きの児童よりも高かった。

- ・ やりすぎると疲れる。
- ・ 疲れると思います。なぜなら激しい運動をするからです。
- ・ 疲れる
- ・ 少し長いから疲れる。
- ・ あまり運動したくないな。
- ・ 楽しくないスポーツ。
- ・ あんまり楽しくない。

しかし、運動嫌いとは回答しつつも、ポジティブなイメージや自分なりのイメージをしっかりともっている児童もいることが分かった。

- ・ 疲れるけれどやっていると楽しい。
- ・ 鬼ごっこがかならず楽しい。
- ・ サッカーで一回でもいいからゴールしたい。
- ・ サッカーとかのルールを決めてみたい。
- ・ ドッジボールは自分のなかで、ボール遊びで1番好きだから思い浮かべた。
- ・ 合気道自分の通い事だから思い浮かべた。
- ・ ドッジボールです。僕は、投げは得意ではないがボールをよけるのが得意です。
- ・ たぶん、楽しいと思います。運動やスポーツをやっているとだんだん楽しくなってくるからです。

運動が嫌いだからといって、すべてが嫌なのではなく、子どもたちは一人ひとり、「～なら得意」とか「～は楽しい」、「～をしてみたい」という想いや願いを持っている。もちろん運動が好きなのは好きな子で、「もっとたくさん遊びたい」とか「～をもっと上手になりたい」、「～の大会で勝ちたい」、「強くなりたい」などの願いや想いを持っている。運動を継続していくにあたっては、過去の運動経験やそのスポーツが好きだから、仲間がいるからなどの要素が強いことが明らかにされている(徳永ら、1989, 須藤、2008, 杉浦、2011)。ゆえに運動を好きになったり、継続したりしていくために、運動との出会いや良いイメージは不可欠であると考えられる。よって、子どもたちの願いや想いを受け止め、さまざまな運動や遊びを提供したり、環境づくりを行ったりして、継続していきけるような支援を行うことは極めて重要であると考えられる。

### 3 おわりに

今回、児童の運動・スポーツ・運動遊びに対するイメージについて分析することを通し、多くの児童は「楽しい」と感じており、鬼ごっこや球技において人気が高いことが明らかになった。身体を動かす機会としては、学校での休み時間や体育授業、放課後の習い事が挙げられる。今回よく行う運動・スポーツ種目を中心にイメージが表現されていたこと、子どもたちは一人ひとり好みが異なり、様々な想いや願いを持っていることを踏まえると、様々な仲間と好きな運動・スポーツ・運動遊びをできる環境づくりは重要である。また、子どもたちの中では球技のイメージが強いが、それに限らず様々な運動・スポーツがあることを伝えていくことは、生涯にわたって運動・スポーツを続けていくうえで必要になってくると考えられる。きっかけ一つで、「楽しい」「好き」というイメージを形成することもできるし、逆に「嫌い」「嫌」というネガティブなイメージに変わってしまうこともある。一人でも多くの子どもたちが、何か自分の好きな運動や楽しいと思える運動遊びを見つけられるようなきっかけづくりが求められる。嫌いから少しでも好きになれば、子どもの身体活動や外遊びの現状も多少は改善できるのではないだろうか。

#### 謝辞

本研究を行うにあたりご協力を賜りました小学校の皆様、ならびに順天堂大学スポーツ健康医科学研究所博士研究員の城所哲宏氏に、心より御礼申し上げます。

#### 引用・参考文献

- 入口豊、斉藤覚、稲森あゆみ、市原悦子、尾麻戸浩 (2009) 「大阪市における児童の屋外遊びの実態に関する経年比較 (I) - 特に遊び時間と遊び場について -」 『大阪教育大学紀要 第IV部』 57, pp.53-67.
- 枝元香菜子 (2017) 「身体活動量を高め運動継続に繋げるための体育授業に関する一考察」 『人と教育』 11, pp.61-66.
- 奥野暢通、大槻和貴 (2016) 「児童の外遊び改善に関する一考察

- 小学校休み時間における外遊びに関するアンケート結果をもとに -」 『四天王寺大学紀要』 61, pp.299-316.
- 杉浦由季、鈴木葵、藤井千恵 (2011) 「女子学生の過去の運動経験と現在の運動習慣および健康認識との関連」 『愛知教育大学研究報告, 教育科学編』 60, pp.63-69.
- 須藤英彦 (2008) 「スポーツクラブにおける中高年女性の運動継続の規定要因に関する研究」 『スポーツ科学研究』 5, pp.96-107.
- 笹川スポーツ財団 (2015) 『青少年のスポーツライフ・データ 10代のスポーツライフに関する調査報告書』
- 竹中晃二 (2010) 『アクティブチャイルド60min. - 子どもの身体活動ガイドライン』 サンライフ企画.
- 徳永幹雄、金崎良三、多々納秀雄、橋本公雄、菊幸一 (1989) 「スポーツ行動の継続化とその要因に関する研究 (2): 大学生の場合」 『九州大学健康科学センター 健康科学』 11, pp.87-98.
- 文部科学省 中央教育審議会 (2002) 「子どもの体力向上のための総合的な方策について (答申)」
- 文部科学省 (2013) 『幼児期運動指針ガイドブック』 サンライフ企画.